

針葉樹会報

第 116 号
2009 年 11 月



目次

近藤泰氏 追悼特集

強い心が生んだ悲運を悼む

二〇〇九年三月妙高山スキー遭難
倉知 敬

追悼
加藤 博行

近藤のテレマークスキー
兵藤 元史

追
近藤との沢登り
前神 直樹

近藤の山
佐藤 活朗

二〇〇〇年GWの梅花皮雪渓
齋藤 誠

近藤さんが教えてくれたこと
川名 真理

台湾玉山登頂記
三井 博

北海道山行
竹中 彰

北海道紀行
蛭川 隆夫

新人歓迎山行
.....

懇親山行 浅草岳・守門岳
.....

山崎拓氏の遭難報告
竹中 彰

三月会通信
.....

針葉樹総会報告
.....

編集後記
.....

表紙写真「北岳ハットレス第四尾根」 撮影・金子晴彦

35 31 28 27 25 24 21 17 16 14 12 11 10 7 5 2

発行日 2009年11月28日

発行者 針葉樹会
(会長 竹中彰)

印刷所 ヤマノ印刷(株)

針葉樹会報
第 116 号

編集人 小島 和人
〒241-0817
横浜市旭区今宿町 2-60-1
会報幹事 / 小島和人、井草長雄
川名真理

一橋山岳会ホームページ <http://huhac.com/>

近藤泰氏 追悼特集

強い心が生んだ悲運を悼む

倉知 敬（昭38年卒）

人生の生き方というのは、ひと様々であるが、往々にしてそれは傍から見ると理解を超えたものであったりする。私が近藤泰さんの生き方について強い印象を抱くところは、常に自己固有の流儀とか価値感といったものがあって拘る、それを貫こうという精神的強さを感じられ、それが生き生きとした快活さをいつも醸し出していた、という点だった。しかし、彼自身に言わせれば、そんなものではないのかも知れず、多分それは私から見た感覚的なものに過ぎない勝手な理解かも知れない。

山岳部を出てから、幸い私にはかなり幅広い世代の同窓の仲間と、長く登山を楽しむ機会があった、その仲間のお蔭でこれまでの私



近藤泰氏

の人生は随分豊かなものになったと感謝しているのだが、近藤さんも、その貴重な人生道連れの内忘れられぬ一人だった。私の卒業後登山は、海外遠征参加がハイライトだったものの、人生を豊かにしてくれたものという観点からすれば、それは断然四〇から五〇歳代に亘るほぼ二〇年間に飽かず続けた正月山行の数々であり、その思い出は深く刻み込まれている。

その正月山行のきっかけとなったのは、一九七九年正月の南岳西尾根からの槍ヶ岳登山である。大分歳の差がある若手、まだ現役ともいうべき前神さんに誘われて、その時一念発起して冬山再挑戦を志したが、一緒に登ってくれた三人目の参加者がまだ卒業後間もない初々しい近藤さんだった。その時遅れて入

山した彼に山麓で出会ったのが、お付き合いの始まりだったと記憶しているが、出会ってまず目についたのが、背中のザックに付けてあった使い込んだピッケルとアイスバイルの揃いである。聞けば社会人山岳会で登攀経験ありの由で、この元気な若者には見るほどにクライマーという風格が漂っていた。ルートのコア部である西尾根下部の急峻な壁では、先行パーティーの固定ザイルが張ってあったりしてバイルまで使う機会はなかったが、彼は終始トップを切って登り、颯爽とリードしてくれた。

ところが、それ以降、彼と正月山行を共にするチャンスは訪れなかった。何故そうなたかは成り行きに過ぎないのだろうが、多分銀行勤めだったから正月の休みを長めにとれない物理的事情もあったのだろう。そうはいつても、主に雪稜を登る私たちの冬山志向には、必ずしも高度登攀趣向をくすぐる要素は多くないから、必死に参加する意欲が湧くまでには至らなかったことが背景にある。それに代わり彼と山行を共にする機会が多かったのは、積雪期ではスキー登山、無雪期では沢登りであった。私にしてみれば毎年、正月にどこかの山頂を踏むというのがひとつの生活習慣のような欠かせぬ行事となっていたが、五月の連休とか夏休みにも冬山で顔な



2005年4月、仙ノ倉岳シッケイ沢で。

じみになった同じ仲間と登るのが当然の成り行きとなった。そういう付き合いの仲間はたいてい十歳も若い世代の、暇があれば山に行く位しかない独身者たちで、彼らが結婚してしまうまでの束の間柄ではあった。私ははるか年長でもある手前、たまには常連の皆さんを自宅に招待して夕食を共にすることもあった。前神、藤本、加藤博、兵藤、佐藤活、小林修、そのほかの諸君に交じり近藤さんも、そういう顔なじみのひとりだったのであり、

いつも繰り返し誰かが、スキーや沢登りも付き合ってくれたのである。

近藤さんのスキー登山は、当初は片手間の雪山登り位の意識だったと思われるが、やがてそれには矢鱈熱心になり、何度が一緒に内にとてもこちらは技術的についていけないようになった。その何度が目の二〇〇〇年一月に浦倉山側から四阿山あすまやさんに登った時には、堅雪やがてやせ尾根となった地形に閉口して、同行の前神さんと私は早々とスキーデボしたが、彼だけはどこだろうとスキーを履いたままドンドン登ってしまい、頂上からは一人だけスイスイと滑り下りてしまった。

また、事故直前の今年一月には、長く止めていたスキー登山を今一度と発念した私に同情して、近藤さんは不忘山ふぼんざんスキー登山を全て取りまとめてくれたが、いざ山に入ったら同情はなしである。登りも降りも嬉々として先へ行ってしまい姿も見えなくなる始末。遅いペースの私はやはり同行の前神さんに付き合ってもらって、あとからゆっくり登降した。不忘山は上に行くに結構傾斜の強い顕著な尾根となり、寒風吹きすさぶ中で、固く締った雪面は、難しい滑走を楽しむ人には持って来いだったるう。私は久しぶりのスキー操作におたおたするばかり、相変わらず威勢のいい

彼の行動力に、また感嘆させられたのであった。

一方、沢登りでも彼は常に率先先行だった。とりわけ、各自手頃なルートで勝手に登る滝場などでは、たびたび鮮やかに難路をこなしてしまつたのを見せつけて、私たちを羨ましがらせたものだ。特に一九九八年七月の笛吹川鶏冠谷は気軽にナメて取り組んだためか、ツルツルの岩を結構苦勞して登る羽目になった。それまではすいすいと登って来たが、とある一寸した滝にぶつかつた。先頭の前藤さんはしばし躊躇つた末、滝の端のクラックをスイツと突破して先に行ってしまった。真似をすれば登れるかと思つて続いた私は、斜めに走る割れ目に手を差し込んで滑りそうに思い切れない。仕方なく後続する佐藤活朗さんにザイルを出してもらって、何とか先に登った活朗さんに私は引っぱり上げてもらう始末だった。

岩登りにはしばしばエイヤツと踏ん切りをつける場合があるが、ひとが登った後でも踏み切れないのは、ひとえに度胸の差だろうか。沢登りには実にいろいろな局面が訪れるが、いつも敢然と立ち向かう闘争心を燃やさなければつまらないのである。俺がルートを決めやる、という心構えが私にはいつの間にか

消滅していき、彼の見える輝きに感心してしまえばかりになってしまった。

ことほど左様に、一緒に登った記憶の中では、近藤さんは閃くままに好きなように登ってしまっセンスを見せつけてきた印象が強いのである。たぶん私たちと一緒にデレデレと登ってはいはつまらないだろう。こんなところはサツと登らなければ格好悪いじゃないか、などという風な美意識を気づかないまでも素直に發揮して、それなりに振舞ってしま



2004年5月、槍沢をテレマークスタイルで滑る近藤氏。

うのだろう。見てみると、強い意志をもってするとというより何気なくそうする、自信あり気だがそれなりに慎重な様子で、危なっかしいというわけではない。そこには、傍で見られる者をして、無理するなよ、とは言わせない自然さがあるのだった。

思うに、人生から創造的な発想ともいうべき精神を取り除いたら、まことにつまらないことになるのではないか。それは何をやるにもそうであり、例えば仕事でも、生活でも、また登山でも似たようなものだ。どんな職業でも、決められた通りするのでなく自分で工夫して何事かを為す、というのでなければやり甲斐もない。だめならリスクは承知で別に天職を求めるしかない。生活だって貧富はともかく、それなりに向上心をもって自分流の家庭や暮らしを追う努力が生甲斐というものだろう。

登山とは、人生に求めるものは安定か変化か、という矛盾する欲望の狭間です、一種のゲームのようなものだ。ひとの尻にくっついて登るだけではゲームの観戦に過ぎないが、何かを求めてこう登るんだという構想があって挑戦する、という自己創造にこそゲームの面白さが集約されるだろう。そこにリスクが伴って不確実性が加わる程、密度も深まる。人生とは、永遠の宇宙にほんの一瞬だ

け存在する自我というものの認識である。消える前に少しでも輝く自我でなければ意味もなからう。言うなれば花火みたいなもので、綺麗に光っただろうと自慢するための人生、そのためにだけゲームを楽しむのだ。

果敢にも挑戦するという、強い心を持たなければ何事も起きないのであるが、生き方をそういう風にする人は、どこかに踏み外すかも知れないなどは思わない。たまたま不慮の結果となっても、偶然そうなつたと、自分は、そして周囲も、容認するしかないことだろう。

近藤さんの事故には一寸した油断があったのだろう、そこまでやろうとしなければそもそも起り得ない類の事故であり、敢えて急峻な斜面を滑り下りようとした大胆さがきっかけになってしまったのは、ただ残念としか言いようがない。しかしながら、人の生き方というの本来、自分でこうするんだと決めるしかなく、やらなければリスクはないから何もしない、というわけにはいかない。それぞれに方向や程度というものは様々であっても、何事であれやることに伴う運命というものは避けられない、そう思うしかないのである。

二〇〇九年三月妙高山スキー遭難

加藤 博行（昭51年卒）

はじめに

近藤泰君は山岳部で私の二年後輩であり、最近でこそ山登りを一緒にする機会はなかったが、学生時代からの長い付き合いが続いていた友人の一人であった。山での付き合いが遠のいていて、しばらく近藤君にも会っていなかった私が、今回の事故があった3月21日に限って、事故現場の妙高山（2454m）から直線距離で30kmの地点にある新潟県上越市の実家に休暇に来ていて、結果的に遭難現場に真っ先に駆けつけることになった。なぜか彼に呼び寄せられ、最後のお付き合いをさせていたいただいたような不思議な縁を感じている。

遭難事故発生の日

新潟県上越地方は、越後の国が京都に近い

方から、上越・中越・下越に区分された中で、古くは『頸城』と呼ばれ、州と後の県境を指す『国境』とは、地理的には近いものの全く別の地域である。上越地方は高田平野を中心に、北東の米山（993m）と南西の妙高山群に囲まれている。米山は薬師如来を本地仏とする信仰の山で、現世に利益をもたらすとされ、一方、妙高山は阿弥陀如来の住する山で、来世の極楽往生を願う西方浄土の山と仰がれている。とりわけ妙高山は、市内からはその端正な山容がどこからも見渡せ、二重火山の形が蓮の花弁に見立てられるほど地元では篤い信仰の対象となっている。私はこの街で、高校までを過ごしており、妙高山は地元の学校の校歌のフレーズに外したものはまじないといっているほどの故郷の山である。

三連休中日の3月21日は早朝から雲ひとつない快晴だった。妙高山は、残雪を纏った中にゴツゴツしたピークを戴いた内輪山と、長い裾野を持つ外輪山が、真っ青な空をバックに眩しく輝いていた。私はいつものように妙高山を飽かず眺め続け、そして穏やかな春も暮れて夜8時半を回った時、埼玉県柏市の自宅から第一報が入った。近藤君の奥さんから電話があり、近藤君と佐藤君、前神さんが妙高山スキー登山中に、近藤君が怪我をして下山できないでいると言った。何だ、いつものメ

ンバーで妙高に来ていたのか。

すぐに近藤宅、前神宅へ電話し、その後、妙高警察に電話して様子が少し判ってきた。近藤君がスキーで滑降中、立木に激突して右肘と右太股に怪我をして、頭からも出血している事、二度へりが飛んだが気流に煽られて吊り上げられず、投下した寝袋と食料で今夜はビバークし、明日はへりと地上からの救助隊が早朝から入ると言う事だった。

その時、私は愕然とした。今日のあの穏やかな晴天でもへりで救出できなかったなんて、何ということだ。ましてや、大怪我をして一晩山中でビバークだなんて。大変な事になったと痛感した。すぐに助けに行かなければと思ったものの、自分に出来る事があまりないことも判っていた。もちろん自分は妙高を何度か登っているし、隣の火打山も15年も昔ではあるが、4月にピークから滑り降りてもいて、このあたりはいわゆる土地勘のある山域である。しかしここ10年程、健康に不安があり山から完全に離れていた。だから道具もないし、とても救出部隊には入れない。

ただ兎に角、今遭難現場に一番近い所にいるのが、針葉樹会では自分のようであり、現場に一刻も早く行く必要があることだけは判った。と同時に、自分では山に入れないので、状況によっては東京から若手で山に入れ

る部隊の応援も必要かもしれないと感じた。西牟田さんや金子さんと連絡を取り、とにかく翌朝一番の電車で現地へ向かうこととした。近藤君の奥さんにも翌朝一番の長野新幹線で現地へ来てもらうようお願いした。

遭難事故収拾の活動

翌朝、年若い母は何を勘違いしたか、6合ものご飯を炊いていた。9個のおにぎりを作り、おかずとお茶、家にあるだけの果物、お菓子をリュックに詰めて、5時過ぎに家を出て現地に向かった。そこからの目まぐるしい活動は、遭難顛末記録にある通りであり、それを読んでいただければと思う。

そこに書かなかったエピソードをひとつ紹介しておきたい。

現地対策本部に着いて、しばらく私は何となく肩身の狭い思いをしていた。パーティが山行計画書を出していなかったであろうこと。入山及び滑降したであろうルートが、山スキーの活発なこの山域にあっても、あまりポピュラーではなかったことだ。それらが暗に『無謀なことをしてくれた』と言わんばかりで、地上捜索隊が天候の悪い中、雪崩の多い地域に入り、二重遭難を起こす事だけは絶対に避けたいと、指揮をとる妙高警察署地域

課の大島課長から痛いほど聞かされた。

とりわけ前神さんの所在が判明するまでの4時間余りは、天候も吹雪となり視界も極端に悪く、対策本部の空気は極度に張り詰めていた。そしてそんな中、前神さんが携帯電話で県警本部に連絡した中で、近藤君が昨夜亡くなつた情報が伝えられ、対策本部にもやり切れない沈黙が流れた。

その空気が幾分緩んだのは、前神さんが下山できた事、捜索隊が佐藤君の待機現場に到着できたことだった。その頃、ちょうど昼にさしかかり、捜索活動支援継続の中で、対策本部の人達8人ほどがお昼ごはんをまともに取れそうも無い時、私は持つてきたおにぎり、おかず、お茶を出した。最初は全く手をつけられる雰囲気になかったが、しばらくして、大島課長が『みんな、折角だからいだけようか』と言ってくれたことで、空気がガラッと変わった。いわゆる遭難本部に寄せられた炊き出しとして受け入れてくれたのだ。

そしてその後、捜索の状況も丁寧に説明してくれ、近藤君のご家族への丁寧な対応や、近藤君搬出の対策会議への参加要請等、積極的に情報開示をしてくれた。遺体搬出はヘリ一本で行きたい方針を明確にして、新潟県警にヘリのスタンバイを迷わず手配してくれたのも大島課長の決断だった。おかげでその後

の日程が分かりやすくなり、やるべきことはつきりした。

あとは今回の救出に参加してくださった針葉樹会の皆様の記録の通りである。

近藤君が生還できなかったことは、事故当日いくつかの不運が重なったとしか言いようがないが、最悪の事態の中で、短期間にご家族の元にご遺体に戻ったことだけは、せめてものことであつたと思う。

近藤君と行った山はもう昔の事でいつが最後であつたかもはつきりしないが、二人だけで行った山として、二人とも大阪勤務の1982年4月に、残雪期の加賀白山に登って歓喜したのはよく覚えている。近藤君も山のテントの夜で、時々冗談交じりに私の高校の校歌一番にある『妙高山は巖々として、千古の白雪天をつき……』を口ずさんでくれたが、我が故郷のその山で若くして亡くなった古い山仲間の近藤君の冥福を、これからもずっと故郷に帰るたびに祈りたい。

近藤のテレマークスキー

兵藤 元史（昭52年卒）

近藤が初めてテレマークを履いたのは2004年の2月8日、場所は富士見パノラマスキー場。その少し前に、嬉しそうにテレマークを買った旨の連絡があり、スキー初級者の川名さん（昭62卒）も誘って練習に行こうということになったのだ。スキー山行の真似事で、入笠山も一応往復した。見様見真似のテレマークでは、常にアイスバーン気味のパノラマの斜面をうまく滑れるはずも無く、近藤は可哀想にもコテン、コテンとこけまくっていた。

それ以前から、山スキーは我々世代では一つの山行形態として定着しており、毎年最低一回は後立山や上越方面に出かけてはいた。針葉樹会報の99号（2003年9月）に、その一端を報告してある（改めて99号を繰りかえす）。掲載の写真は上下が逆になっている。

しかし、近藤のスキー山行が急激に増えた

のは2004年2月以降のことだと、今改めて記録を眺めて実感する。私が同行したものだけでも、その年に5回、2005年も5回、私がインドネシアに異動・駐在することになった2007年までの4シーズンで計15回を数える。近藤との最後のスキー山行は、私が休暇で一時帰国した際の2008年2月の乗鞍岳付近の猫岳となった（末尾に近藤のテレマークスキー山行、全27回を記載した）。



2004年、入笠山・富士見パノラマスキー場で。近藤(左)と兵藤。

近藤は、慎重なくせに妙に大胆なところがある奴だった。学生3年の時に、冬の薄谷に行くと言い出して、先輩連を困惑させたことなど、その例だらう（実際、浪人時代に属していた山岳クラブの方と第4尾根を登った）。テレマークを始めて、次に目指したのが3月の乗鞍岳と平標。しかし二度とも天気が悪くて、ゲレンデでの練習に留まった。そして、次に行きましようと言いついた場所が、槍ヶ岳飛騨沢。ついでに槍沢も滑って、一粒で二度おいしい山行にしよう、例の性格がテレマークにおいても表れたようだ。

2004年5月5日早朝に東京発、夕方槍平冬季小屋着。翌日、快晴の飛騨沢を詰め上がり、槍沢を殺生小屋上部まで滑る。その晩は槍ヶ岳山荘泊。いつもテントで泊まっていた我々にとっては、小屋泊まりは極楽そのもので、新しいアイデアが次々と浮かんできたものだった。曰く、槍沢小屋（泊） 槍 槍沢から横尾本谷滑降 涸沢（泊） 北穂 北穂沢滑降 横尾や、白馬小屋に泊まったの旭岳周辺の幾つかの滑降ラインや杓子沢。

翌7日も快晴で、雪が緩むのを待つて9時過ぎに滑り出す。広大な飛騨沢は快適で、決して上手とはいえない近藤のテレマークも様になってきたように見えた。そう言つと、近藤はテレマークのポーズを嬉しそうにとつて

は、私の目の前を滑るのであった。数回に一回はコテンと転ぶところが、愛嬌ではあったが……（針葉樹会報101号に近藤による本山行の報告があります。ここでは、山行の言い出しっぺは私という記述になっていますが、違うように思います）。

2005年のスキー山行は一層充実したものとなった。3月の乙妻山北東斜面、4月の仙ノ倉シツケイ沢右俣、5月連休の焼山北面大地、いずれも記憶に残る良いスキー山行となった。特にシツケイ沢は、仙ノ倉岳の頂上から無木立の斜面が標高差1000mほど一直線に続き、雪質も上等なザラメで、その後もどこが良かったかという話題になる度に、このスキー山行が挙げられることになった。登山口の元橋とは逆の土樽側に下りてきたため、湯沢からバスに乗って元橋に残した車をピックアップに行かなくてはならなかったが、こんな時の常で、近藤が進んで行ってくれた。

「50歳になって無謀にもテレマークを始める」と前述の会報に近藤が記している。始めると一直線の近藤のこと、日帰り単独でグレンデ講習に行ったり、家族とのスキーでもテレマークに専心したりしていたようだ。2シーズンも過ぎると、あきれるほどうまくなっていた。踵が固定されたアルペンスキー

とそうでないテレマークとの差は、近藤によれば「E&E」「F&Fの自由な感覚」とのことだが、その感覚を実感し始めたのがこの頃ではないかと思われる。慣れないうちは、下半身特に大腿筋とつま先に必要以上の力が入っていたスキーが、力が抜けたスムーズな滑りに変わってきた。

2005年の乙妻山のときには、登りに筋力を使わずにと上手く滑れないんですと、滑降時に嘆いていた近藤だったが、翌年の4



2005年、仙ノ倉岳。左から兵藤、近藤、山田。

月に出かけた乗鞍岳では、シツケイ沢にも同行していた山田（平成15卒）からも「巧くなりましたねえ」と感歎の声が上がっていた。スクワットなど、筋力トレーニングを続けていたのだと思われる。近藤はそういう奴でもあった。この乗鞍岳では、ノーマルルートではなく、位ヶ原からみて左手の尾根及びその右の沢状を直上して直接頂上に達し、帰途も同じルートを取った。結構急な斜面ではあったが、近藤のテレマークにはもう何の問題も感じられなかった。

2007年の1月には、平湯温泉の裏の十石山でパウダーを味わった。土曜日の朝、東京を出て午後は近くのスキー場（この時は野麦峠スキー場）で練習をし、夕方取り付きまで入って宴会、翌日山スキーを楽しんで帰京という、いつもパターンだった。暗くなる前に移動してテントのセットをするべく、練習は3時過ぎには止めようぜ、と約束したのにも拘わらず、練習に余念が無い近藤が上がってきたのは4時になっていた。

翌日、頂上ではガスにまかれ、風もあって辛い思いをしたが、林間の下降では極上のパウダーに恵まれ、二人は「浮遊感」を味わった。近藤にとっては初めての感覚だったようで、「いいですねえ」を連発していた。余りの快適さに、少し左に行くべき所をついつい真

< 近藤のテレマークスキー山行記録 >

年 月	山 名	同 行 者
2004/2	入笠山	川名、兵藤（初テレマーク）
2004/3	乗鞍岳	川名、兵藤（天候悪く、ゲレンデ練習）
2004/3	湯沢（平標）	山本(健)、兵藤（ " ）
2004/5	槍ヶ岳	兵藤（飛騨沢、槍沢を滑る）
2004/12	神楽山	川名、山田、兵藤
2005/2	安達太良	齋藤（吹雪のため敗退）
2005/3	乙妻山	川名、古瀬、兵藤
2005/4	仙ノ倉	川名、山田、兵藤（シッケイ沢右俣を滑る）
2005/4-5	焼山 / 火打山	斉藤、大松、兵藤
2005/5	乗鞍岳	川名、兵藤
2005/12	樽池	前神、山田、川名、古瀬、兵藤（ゲレンデのみ）
2006/3	東吾妻山	佐藤、川名、斉藤、大松、佐川、兵藤
2006/4	乗鞍岳	山田、兵藤
2006/5	月山 / 蔵王山	前神、佐藤（蔵王は熊野岳）
2007/1	十石山	兵藤
2007/3	輝山	兵藤（雪質悪く中退）
2007/5	鳥海山	前神、佐藤、川名、斉藤、大松、佐川、兵藤
2008/2	猫岳（乗鞍）	川名、兵藤（猫岳を目指すも大崩山まで）
2008/3	磐梯山	齋藤
2008/3	苗場山	川名、佐藤（秋山郷から）
2008/4	八甲田山	前神、川名、古瀬、斉藤、大松、佐川、佐藤
2008/11	猫岳（乗鞍）	前神、佐藤
2008/12	西吾妻	齋藤、大松、佐川（ドカ雪で敗退）
2009/1	不忘岳	倉知、前神、佐藤（南蔵王）
2009/2	焼岳	川名、淵沢、山田、佐藤（中の湯～大正池）
2009/2	博士山	齋藤
2009/3	妙高山	前神、佐藤

注：同行者の明朝表記は会員外

直ぐ下りすぎて、深雪のトラバースで一時間ほど苦闘したのはちょっと余計だったけど……。

私のインドネシア赴任前に皆で大挙してで

かけた5月の鳥海山では、近藤は既に「テレマークでウエーデルン」のレベルに近づいていたように思います。そんな近藤が立ち木にぶつかって、あっけなく逝ってしまうとは、今でも信じられない思いで一杯です。こうし

て近藤との山スキー行を思い出していると、ふと次はどこに行こうかと考えている自分があります。もう近藤との次は無いのですが……。

兵（マルヘイ）様、で始まる近藤からの山スキーへの誘いのEメールが、ここ何年も雪の季節の楽しみでした。

『兵様、来週の3連休は、前神、佐藤両氏と妙高本山に、赤倉杉の原スキー場から三田原山経由で登ってくるつもりです（百名山というやつですかね？）。今年は雪が少ないです。兵さんも早く一時帰国しないとスキーできませんよ。ではでは。（2009年3月11日付）』

そして、これが近藤からの最後のメールになつてしまいました。横尾本谷右俣、北穂沢、杓子沢、そして利尻や知床、一緒に行くはずだった山は、まだ一杯残っているのに……本当に残念です。

合掌

近藤との沢登り

前神 直樹（昭51年卒）

雨、雨、雨、空からつんざりするほど降ってくる。しかも腰から下は水また水、水に完全につかりっぱなし。96年夏の黒部川上の廊下は予想もしなかった水攻めで初日が始まった。

都会の暑さと理不尽な仕事のストレスから逃げるためには沢登りが一番と近藤や佐藤、兵藤とはよく夏の沢登りに出かけた。ともかく行動派だった近藤は沢登りでもスキー登山でもどんだんアイデアを出してきて、その計画に乗ったこと数知れず。上の廊下も随分前から話していたもののお互いが海外駐在になつたりで結局は10年も経っていた。

96年の夏いよいよこの沢登りが実現した時も計画の詳細はすべて近藤が立てた。初日の水攻めはつらかったけれど、近藤はそんな悪天候の中をぐいぐい引つ張ってくれて、適当なところでテント張ろうという僕の安易な気持ちに着めて、降り続く雨がどんな豪雨に

なるうが絶対大丈夫の安全地帯を見つけられた。

翌日は雨には降られなかったが、さすがは上の廊下、水の量が中途半端ではない。水の中のスタンスを足で探りながらへつる箇所が随分あったが、ザックが浮き袋になってしまつてスタンスから足が浮いて水に流されそうになる、すると先行する近藤がザイルを引いてくれて事なきを得る。こんなことを繰り返しながら進んでいった。泳ぐ箇所はクロールでない水に流されるので僕が先行した箇所もあったが、ほとんどは近藤に先導してもらった。

苦勞した遊行も赤石沢にはいると、一転して明るくこの世のものとは思えないほど綺麗でしかもすべて直登可能な滝が連続する。近藤もこんな綺麗なところはなないとニコニコだったし、もう水に流される恐怖がなくなつた僕も思い切り沢を楽しんだ。

この遊行の最後の最後は富山駅前のレストランだった。太郎平からタクシー会社に電話が出来て有峰口に下りてきそうな時間にタクシーが迎えにくるといふ。近藤と欣喜雀躍、下山口までは何を食べるかの会話が続いた。

この上の廊下は最初の水攻めから最後の寿司にいたるまで本当に印象的だったけれど、しかしもう本格的な沢登りは今回の上の廊下

で最後にする、五十代に近づいているサラリーマンがやれることではないと近藤に話していた。しかし彼の前に向かって突き進む姿勢は、そんな僕の尻込みを砕いてしまった。

翌97年夏、「赤石沢はどうですか？ 二工淵の上流に取水口が出来て水量は半分ですよ」の言葉にうなづいてしまふ。しかも古田、古瀬の屈強クライマーと一緒にいる。写真で見ることがないだろうと思っていた赤石沢を実際この目で見るのかと思つと体力、技量はぜんぜん追いついていないにも関わらず、ついつい樂觀的な思考になってしまふ。

この赤石沢も結果的には実現したが、近藤はこの赤石沢行でも果敢に攻めていた。が、こちらは前の年の上の廊下どころではなかった。滝にしろゴルジュにしろすべて引つ張つてもらつてようやく沢は抜けた。古田・古瀬は別にしても近藤は僕とそれほど年が変わらないのによくあんな難しいところを平気でこなせるな、と感心を通り抜けて感嘆物だった。上の廊下に懲りず赤石沢には行つたけれど、これ以上の沢はもう何が起きてもおかしくないと近藤と話し、歳相応に戻ろうということにした。

一緒に行つた沢登りは数限りなくあったが、上の廊下と赤石沢はその中でも印象が強烈だった。

近藤との付き合いは彼の大学入学以来30数年になる。その間数え切れないほどの山登りを一緒にしたが、特に社会人になってからはほとんど近藤に頼り切った山行だった。僕がずっと眠りっぱなしの中で近藤に徹夜で白馬まで運転させたり、恋の股沢で滑落して歯を折ってしまった僕を東京まで送るため疲れた体に鞭打って深夜まで運転してくれたり、今思うと「お世話になった」などという言葉ではとても言い表せないほどの迷惑をかけた。

そんな迷惑を掛けっぱなしだった僕ではなしに近藤が先に逝くというのは理不尽な話とつくづく思う。月並みな言葉しか出ないけれど近藤には本当に「ありがとう」というしかない気持ちです。

近藤の山

佐藤 活朗（昭53年卒）

三五年來の仲間

（以下、ずっとそうしてきたように「近藤」と呼ばせてもらいます）

他の仲間と同様、私と近藤との交友は彼が一橋に入学し山岳部に入った一九七四年に始まる。同じ一九五四年生まれの我々二人がこの三五年間に共にした山行は合計六五回・延べ一六八日にのぼる。卒業後（一九七八年）に限定すれば、四〇回・六四日で、掛け値無く私にはもっとも多く山行を共にした仲間だ。近藤無き今、彼が私の人生に大きな位置を占めていたことを痛感する。

近藤の山について

長く山を続けている人は、体質や好みに応じて山の登り方が確立してくるものだ。私は、一貫して変わらなかつた近藤の登り方とは「新たな目標を自らみつけてチャレンジする」という真面目なものだっただけだと思つた。

知り合つた頃の彼はクライミング（岩登り）指向が強く、当時の山岳部では彼の願望は充分には満たされたとはいえない。しかし、山岳部でクライミングに偏しないオールラウンドな登山　長い積雪期登山や困難な沢登りなど　を経験し、汎用性の高い登山技術を身につけたことが、彼や私がその後息長く幅広い登山を楽しむことにつながつたと思つた。

卒業後一〇年ほどは多忙や海外・地方転勤ですれ違ひが多く、彼との山行は少なかつた。しかし、私が米国から戻り一九八七年春に守門岳スキー行に参加した（針葉樹会報第69号）／同行者は近藤の他に中島寛・倉知敬両氏）ことをきっかけに、再び近藤との山行が復活した。彼は学生時代に比べると慎重で辛抱強くなり、安定感が増したと感じた。

それから二〇年余のほぼ毎年、彼を含む同年代の仲間と、積雪期は山スキー、夏は沢登りという山行を続けた。彼が発案するやや困難な計画に私や他の仲間が軟弱な修正案を出してまとまるというパターンが多かつた。次第に責任が重くなつていく社会人として、また父親として、テントの夜、悩みを語りあつたことも忘れられない。

私と違ひ彼は山で自ら飲食に制限を課したりするストイックなところがあつた。五〇歳

を過ぎて、トレーニングとして独りで酷暑の丹沢縦走や筋力鍛錬をしていた。彼は一貫して、自分の身体で受けとめる充実感・達成感を求めていたように思う。難度は下がっても、新たな目標をみつけてチャレンジする登り方は最後まで変わらなかった。

この一〇年ほどの彼の変化としては、テレマークスキーは別稿に譲るとして、日本百名山を課題とするようになったことが印象に残る。困難を伴う山を好んでいた彼が、登ること自体は難しくない日本百名山を気にしていると知ったときは意外に感じた。たぶん、彼なりに加齢に合わせてチャレンジの方向修正を図っていたのだと思う。この五年ほどは春の山スキーで東北などの百名山を踏破することが仲間うちのテーマだった。彼の百名山は、妙高山の頂上で私に告げた七〇座で終わった。今年の五月の連休は、近藤の発案で北海道の大雪山などをスキーで巡る予定だったが。

二人での山行

山岳部時代の修行をもとに、気心を知り抜いた？ 近藤や他の仲間たちと、三〇代から五〇代半ばまでに重ねた山登りが、ささやかではあるが私にとって山の黄金時代だった。その中でも、以下の二人だけの山行は忘れら

れない思い出だ。

富士山スキー（一九九九、二〇〇一年）五月に二度、吉田口五合から試みた。どちらも天候が悪化して頂上には僅かに達せず、五時間かけて登った火口直下から国内最高高度差？の吉田大沢を五合まで三〇分まで滑った。いずれ二人で頂上から滑るはずだった。

前穂高岳北尾根（二〇〇四年六月）梅雨の晴れ間で人影の無い、私には三〇年ぶりの古戦場。松高ルンゼの入口に気付かず、知らずに奥又本谷を登り五六のゴルでツエルトを張った。翌日、三峰で学生の頃と同じに近藤トップでザイルを結び、我々だけの頂上から岳沢を下った。

霧島山、開聞岳（二〇〇六年一月）百名山巡礼。東シナ海と開聞岳を望む宿で露天風呂と焼酎を堪能。従来と一味違う悠然たる山旅に感じるものがあつたらしく、彼はその後ときどき「あの時は楽しかった」と言っていた。なお、近藤は昨年、八恵夫人と屋久島の宮之浦岳に登っている。

二〇〇〇年GWの梅花皮雪渓

齋藤 誠（昭63年卒）

二〇〇〇年のゴールデンウィーク、近藤さんと私は飯豊山へのスキーツアーに出かけました。福島県の山都やまとから飯豊本山を経て梅花皮雪渓を滑り降りるロングルートでした。

飯豊は私の故郷、会津高田町（現在では合併して会津美里町となっている）からその威容を仰ぎ見ることが出来る山で、夏になっても山頂部に白い衣をまとい、スケールの大きさを否応なく見せつけておりました。

しかし私が山に登るようになったのは大学山岳部に入ってからのもので、少年時代にその山に登ることはありませんでした。

飯豊への登山経験は大学二年の冬合宿（秋の偵察あり）が最初で、磐越西線の日出谷駅から実川さかかわ沿いに水晶尾根を大日岳に登り、御西岳、飯豊本山を経て三国岳から山都の川入に降りた。長く、吹雪に苦しめられた辛い記憶が最初のものでした。それから一五年近く経った二〇〇〇年、二度目の飯豊が近藤さん

とのスキーツアーだったわけですが。

夜に喜多方の駅で合流し、タクシーで川入まで入り、分校の校庭にテントを張って仮眠し早朝登り始めようとしたのですが、そこで私のストックが無いことに気付きました。タクシーのトランクから下ろし忘れたのでした。

スキーにそこそこ自信のあった私でしたので、ストック無しでいいか、と覚悟しようとするのを、近藤さんが諫めました。梅花皮雪渓の急な斜面をストック無しで滑るのは危険だと。

まず、民宿に相談して不要なストックはないか交渉しましたが、残念ながら入手できず、乗車したタクシー会社に連絡を取ると、ストック一セットで四千円、片道分は払ってくれとのことでした。トランクの荷物を下ろし忘れた訳ですから、半分以上はタクシーにも責任があると主張したものの、半額は譲らず、一時間程ストックの到着を待つ羽目となりました。

出遅れを気にしながら六時過ぎに登り始め、陽射しを浴びながら長く長い尾根をあえぎながら登り、地藏山を越えると剣が峰のナイフリッジがずたずたに切り裂かれているのが遠望でき、口を開けたクレパスが今にも崩壊しそうで、先行していた一〇人程の団体は、

前進をあきらめたようでした。

我々も、雪の悪さに閉口しながら、ザイルが欲しいなと思いつつ、せっかくの休日を終わりにしたくはないという想いで、前進を決断したのでした。岩稜と雪の間はご存知の通りほつかりと空間が開き、岩を伝うか、雪上をはい上がるか迷いながら、高度を稼いでいきました。スキーを担いでの登高はバランスが悪く、ひどく体力を消耗しました。

何とか登り切って三国小屋に着いたのは一時過ぎで、切合小屋を目指す気力は残っておらず、宴会の準備へと入ったのでした。

翌日も晴天の中、六時前に出発し飯豊の主稜線を快調に進みました。切合小屋、本山小屋を経て飯豊山頂に着いたのは一〇時過ぎで、初めてスキーを付けて滑走を楽しみました。昼過ぎには御西小屋に到着。ここで泊まってもよかったです。GWの陽射しが雪を腐らせる前に朝一番の梅花皮雪渓を快適に滑りたいのだという近藤さんの目論見に従い、梅花皮小屋を目指しました。長い尾根をスキーを着けて滑り、登り降りを繰り返して、へーへー言いながら何とか四時前には梅花皮小屋に着きました。GWの小屋は満員状態でしたが、できて程無い新しい小屋は快適なもので、酒は順調に進みました。

翌朝、この瞬間のために積み重ねてきた長

イルートを脳裏と眼で振り返りながら、小屋からダイレクトに広がる梅花皮雪渓の急でクラストした斜面を滑り始めたのは五時を過ぎたばかりの頃でした。

この時、ストックを携帯してきたありがたみを感じ、近藤さんのアドバイスに感謝したのでした。一九〇センチの長いスキーとひもで結ぶプラスチック登山靴の滑走に、GWを迎えた梅花皮の早朝の斜面は手強すぎ、滑るといふよりは、ほうほうの体でキックターンを繰り返すばかりでした。近藤さんの華麗な山スキーの滑りを常に下に見下ろしながら。

国民宿舎の梅花皮荘に到着したのは一〇時前。温泉で二泊三日の山の汗をぬぐい、小国の町へとバスに揺られ、飯豊の山スキーは終わりました。

こんなスキー山行を年に一〜二度、コンスタントに重ねてきました。前神さんや兵藤さん、佐藤さん達「東京組」と私が福島で知り合った大松君、佐川君の若い二人との「福島組」が山で合流し、酒をはさんで交わりました。私をはじめ、若い二人にとつて近藤さんをはじめとする「東京組」の話題は豊富で、刺激に満ちていました。

我々を結びつけていた要の近藤さんを失ったことを未だに信じていることができません。雪

の季節を迎えたとき、誘いのメールが来ないことを、福島に住む我々がどう受け止められるか、ぼっかりと空いてしまった穴をどう埋めていけばよいのか想像することができないのです。

近藤さんが教えてくれたこと

川名 真理（昭62年卒）

近藤さんがテレマークスキーを始めたシーズンに、わたしも山スキーを再開しました。テレマークに意欲を燃やす近藤さんと、それにつきあう兵藤さんのおふたりに誘っていただけなことがきっかけです。

記念すべきテレマークデビューの日、近藤さんはコケまくっていました。カーブするたびにコテン、コテン……。横にいる兵藤さんが「近藤は、アルペンスキーはすぐくうまいんだぞ」とフオローするほど。テレマークは大変そうだなあ、というのが正直な感想でした。

でも、シーズンを重ねることに近藤さんは

どんどんじょうずになっていきました。雪面が狭くて細かくターンしないと通過できない場所では苦労されていたのに、そういうテレマーク向きでない場所があることも、やがてわからなくなっていきました。

最後に一緒に過ごさせていただいた北アルプスの焼岳では、木々を右へ左へと自在によけながら、力が入っていることをまったく感じさせない優雅な滑りぶりです。いかにも楽しそうでした。午後の日射しを受けて輝く穂高連峰を見ながら、ふわふわの雪を舞うように……最高にゴージャスな滑りでした。

そんな近藤さんに教わった上達法は「12月、1月の平日・日帰り格安スキーツアーに参加する」という手。おもに学生相手ですが、この時期は試験にあたるので参加者が少なく、団体レッスンに申し込んで個人レッスンが受けられるというのです。

そこで必死になって平日休めるようにやりくりし、奥利根スノーパークに2度、白馬に夜行バスを利用して1度、ひとりでスキーツアーに参加しました。

早朝や深夜、若い人にまぎれてコンビ二袋をぶらさげ、ひとりバスに乗るのは、わびしいものです。近藤さんも「修行と思って」とおっしゃっていました。「うまくならない！」という気力があふれるようになれば、こん

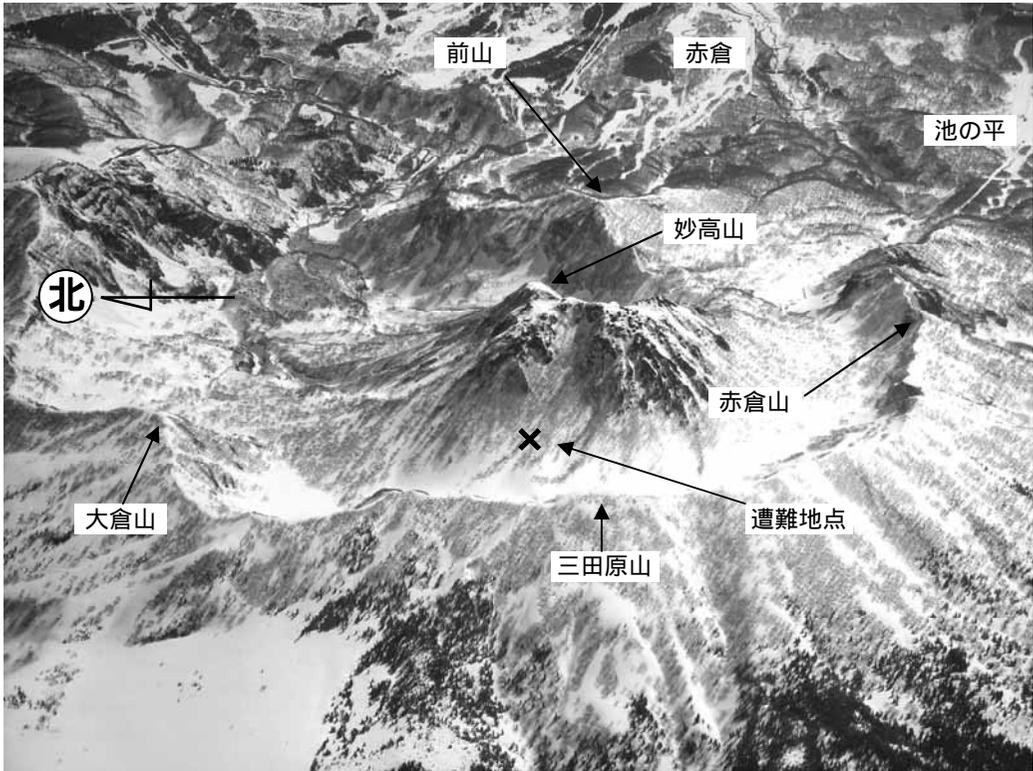
なことはできません。

おかげで奥利根では計画どおり、親切な先生に1対1でいいねいに教えてもらうことができ、成果を実感しました（白馬は観光化が進んでいるせいか指導がとおりいっぺんでピンと来ませんでした）。

その後もスキー合宿のあと、ひとり居残って練習するなど地道に努力したつもりですが、仕事とスキーの二兎を追うのは難しく、何年たってもあまり上達したとはいえないのが実情です。

ところが近藤さんは会社が変わり、これまで以上に忙しくなった昨シーズン、拍車をかけるようにスキーに出かけられたと聞きまします。「これ以上は上達できないと思う地点に達した」とおっしゃっていたのが鮮やかに記憶に残ります。「太く短く生きたい」「努力しない奴には自分は冷たい」という言葉も耳に残り、わたしのような人間はいつか近藤さんに見捨てられるかもしれないと密かにおそれていました。

いくつになっても「向上」をめざす気概が、はつきりした結果を生むことを、身をもって教えてくれた近藤さん。ゆっくりかもしれませんが、わたしなりに向上していくつもりです。だから見捨てず、天国からあたたかい目で見守ってくださいね。



南西方向からみた妙高山。航空路から。写真 = 金子晴彦氏提供



2009年。焼岳を滑り降りて上高地へ。
左から川名、近藤、湊澤、山田、佐藤。

台湾玉山登頂記

三井 博（昭37年卒）

台湾には標高3000m以上の山が250座以上あり、最高峰はかつて新高山（にたかやま）と呼ばれていた玉山（ユイサン）3952mで、富士山より約300メートル高い東北アジアの最高峰です。岳友遠藤晶土君と毎日新聞旅行のツアーに参加して登りました。

玉山は登山道が整備され難しい山ではありませんが、外国人は一日24人以内に制限され、オーバーすると抽選で当選者に登山許可証が発行され、登山口でパスポートとともにチェックされます。また、中華民国登山協会の現地ガイドを必ず雇用しなければならぬ規則があり、登山以前が厄介です。2009年5月10日、成田から台北にフライトし、バスで5時間半もかかって、東埔山荘につきました。



2009年5月、玉山山頂。左から遠藤、三井。

5月11日（月）

5時に起床、6時に出発する。すぐに塔塔加警察分隊所及びツーリストセンターに到着する。入山許可証、パスポートをチェック、写真で本人確認後出発、登山口の塔塔加鞍部に着く。7時30分登山開始、歩き易い山道をゆっくり登ってゆく。玉山は山は急峻であるが、登山路は山腹を切り開いて開発しており、急登、急降下が少ない。代わりに橋が多くかけられており、86橋もあって、番号が鉄板で

打ちつけられている。

約3時間歩いて西峰観景台に着いた。ここで初めて玉山主峰の頂上が見えた。ガイドは陳さんという山岳協会のベテランで日本語もペラペラである。彼が連れてきたポーター兼料理人の王さんが、温かいみそ汁とウーロン茶を沸かしてくれた。

観景台を出ると勾配が急になり本格的な登りとなるが、難しい悪路はなく最後の200段の木段を上がると、森林の中の排雲山荘に到着した。到着時間は14時15分、6時間半の行程で、標高差は792m、予想していたより楽な登りであった。遠藤君はいたって元気である。

排雲山荘の寝具はシユラフであったが、湿っぽい。小屋の前の机に広げて乾かす。間もなく学校の先生に引率された高校生、中学生、小学生が続々と登ってきた。台湾の登山は学生が主体で、中高年の社会人は殆どいないそつである。

5月12日（火）

昨晩は学生たちがうるさかった。ハーモニカ、ギターの演奏、放歌で先生も一緒になって騒いでいた。8時の消灯で静かになり数時間まどろむ。午前1時過ぎに起床、2時に出発する。リーダーの陳さんを先頭にヘッドラ

ンブで足元を照らしながら黙々と歩く。昨日よりはるかに急俊である。すぐに森林限界となり、岩と土の急斜面が続く。危険と思われるところには太い鉄鎖が固定されている。陳さんは全く休まない。休むとかえって危険である。

ジグザグの岩場の急登をくり返し、4時45分に玉山の頂上に立った。2時間45分の登りであった。東の中央山脈の山が赤く色つき、ご来光となった。メンバーが一斉にシャッターを切ると、リーダーはすぐに下山を命じる。もう少し長くいたかったが、頂上は狭く、狭い山道の交差は難しいとのことである。案の定、下ってゆくと、団体が続々と登ってくる。一時かなり待たされたが、玉山頂上発が5時15分、排雲山荘着が6時55分で1時間40分で下ってきた。

朝食後、荷物整理を終えて、8時に排雲山荘をあとにする。遠藤兄は下りは何と云ってても早いと言っていたが、このコースは高低差が少ない割に距離が長く、塔塔加についたのは、14時10分で6時間10分かかり、登りと殆ど同じであった。メンバー12名(男7、女5)は全員元気で高山病には誰もかからなかった。東埔山荘に帰り、荷物整理後、台湾観光協会理事長でもある陳さんの豪華な食事、阿里山の観光などへて、嘉義のホテルに

泊まり、翌日成田に帰った。ひとつ難点は、台湾では国家公园(日本の国立公園)内は禁酒であり、玉山国家公园内、阿里山国家公园内の食事の際にはアルコールがなかったことである。

北海道山行

竹中 彰(昭39年卒)

梅雨のない北海道の花と野鳥を楽しもうとの蛭川さんの呼掛けに乗って大雪山系の黒岳忠別岳 赤岳周回、道東の標津岳、西別岳を目指した。

・メンバー 佐雑恭(S31)、蛭川隆夫(S39)、蛭川紀巳子(夫人)、竹中彰(S39)、藤田晴紀(小野さん)(S40)と北電の同期入社で、過去にも世話になっている)の5名

・行程 7/9 羽田 旭川 層雲峡 黒岳 黒岳石室

10 石室 白雲岳避難小屋

11 白雲岳避難小屋から忠別岳往復

12 白雲岳避難小屋 赤岳 銀泉台
旭川で前半行程打ち上げ

【概要】

7/9(木) 曇り一時雨

早朝、各自自宅を出て、予定の7時に在京メンバー4名が羽田に集合。

7:45発のADOOS1便で6:00に旭川着。ターミナルで藤田さんの出迎えを受けて直ちに藤田車(以前札幌のトヨタディーラー副社長専用車だったフル装備のクラウン)で黒岳の麓層雲峡に向う。道中、藤田さん(送電関係技術者)お得意の電気に関する話題(電気の貯蔵について、室蘭製鉄所厚板ローラ操業時の電圧の乱れ等)で盛り上がる。

層雲峡ロープウェイ駅に2:00到着、食料、共同装備の配分パッキング後、ロープウェイ(1000円)、リフト(400円)を乗り継ぎ黒岳7合目(1500m)に到着。リフトに乗り継ぐまでの遊歩道、リフト下には高山植物も現れる。

12:55にリフト終点の7合目をスタートして直ぐ雨がぱらつき、雨具を着ける(13:05)。ルートは06年9月の針葉樹会ニベソツ山遠征時に辿った時と同じ。

登山道脇にはウコンウツギ、キバナシヤクナゲ、ウラボシロナナカマド、ハクサンイチゲ

等の花が咲き、這い松の赤い雄花が目立つ。稍々スリッピーなジグザグ道を上がり、339.7mでピッチを切り、マネキ岩を左手に見て3ピッチの15.05に黒岳(1984m、1515)到着。

遠景はガスってハッキリしないが、下り気味の平坦な道を黒岳石室を目指す。道中にはエゾコザクラ、イワブクロ、コマクサ、ツガザクラ、ヒメシャクナゲ等が咲き乱れ、疲れを癒してくれる。30分強の歩行で1984mに石室(避難小屋・定員100人)着。狭く薄暗い小屋だが、1人2千円を払って受付を済ませると、薄べりと毛布1枚ずつを割り当てられた場所に広げ、佐雑さんのホンマキラー(95%アルコールのウオッカ)をポカリスエットで割って乾杯。水は小屋前のタンク(ドラム缶?)から汲み、煮沸して使用する。

到着後次第に雨が激しくなり、到着する客も増えてくる。炊事は入口近くの棚にバーナーを据えてパーティー毎に交替で行う。初日の夕食は鰻丼として保冷剤でキープしたレトルトの鰻を温め、アルファーマに載せて食べる。今回の食事は基本的にレトルト物を利用して炊事に手間をかけない事を眼目に計画した。

トイレは隣接の建物に洋式便座と朝顔がセットになった個室が4室あり、使用後は自

転車漕ぎでオガクズを混ぜる事になっていた。食後はする事も無く、時々外に出て天気の間復を窺うがガスが薄くなったり厚くなったりで視界も悪い。ただ、連泊客によれば前日まで土砂降りよりはずっとましとのこと。岩室で土間の上に板を渡した簡単な構造の故かシユラフに入っても湿っぽく冷える。深夜にトイレに出た時には薄く月も見える状況で翌日に期待が持てた。

7/10(土) 風雨のち曇り

他パーティーの出発準備の音(特にヒグマ除けの鈴)で目が覚め、5時過ぎに起床。食事の仕度にかかるが、外は雨模様。紀巳子さんが寒さで余り熟睡できなかったようで、体調不調を訴え藤田さんが付き添って下山する事になる。豚汁雑炊の朝食後食料の配分を変更し、パッキングして825に小屋を出て直ぐに下山組と別れる。上下雨具の完全武装で、佐雑、蛭川、竹中は白雲岳避難小屋に向けて石室からかなり下る。トレースのある北海沢のスノーブリッジがやせ細っているのを見て、数十メートル下流の雪渓上を右岸に渡り、雪渓、岩混じりのルートを辿る。北海岳手前でピッチを切り、一息入れる(2125m、9575)。

その後も岩の多い斜面を斜行し、1040に

北海岳頂上に着く。稜線が上がった為に風も強くなり、写真撮影に際し蛭川さんのレインハットが脱げて風に数回転がったと思う間に、サツと飛ばされて回収も不可となる。写真を撮って直ちに道標に従い、今までの進路から左手(南東方向)に90度折れて、白雲分岐を目指す。

それまでの左後方からの風が進行方向左斜めからになり、強風と雨に逆らって深くえぐれた登山道を進む。30分程でベンチの置かれた北海平に着き小休止するが、雨風は止まず、視界も良くない。その後もアゲンストの風に向って進むが、気温もかなり下がって来ているのを実感し、濡れた手袋で手も凍える。一時アラレが降り、指が2月の天狗岳に向かった時の様に痺れ、一生懸命に動かしていたと蛭川さんの言があったが、夏山とは思えない低温に驚く。後刻小屋で旭岳から来たガイドの話では気温は4~5度位とのこと。(後日トムラウシに向って縦走していたツアーが遭難し、8人もの死者を出したが、秒速20mを越す風に吹かれれば我々も危なかったかも...と感した。)

白雲岳直下のかなり大きな雪渓をトラバースし、岩の重なり合ったルートを黄色ペンキを目印に登って、1130に白雲分岐を通過し、下りにかかる。その後1100に漸く木造2階

建ての立派な白雲岳避難小屋(定員60人)に到着、コースタイムで3時間の所を殆ど休憩しなかったにもかかわらず3時間35分を要した。濡れた雨具を脱ぎ、受付して2階の奥のコーナを割り当てられ、シュラフ等を広げて態勢を整えて先ずは気付け薬で乾杯。雨は相変わらず降り止まず、花に目をやる余裕も無く過ぎてきた道中を思いながら寛ぐ。石室より暖かく快適であった。夕食はレトルト中華丼を温め、海藻サラダと共に摂る。トイレは小屋の外に2つのポットトイレ個室で、「使用後のペーパーは持ち帰ること」との注意書きがあるが、覗くと下に散乱しており、マナーの悪さを感じた。



7月14日、標津岳山頂。左から佐藤、竹中。

7/11(日) ガス時々雨

この日の予定は高根ヶ原、忠別沼を経て忠別岳まで往復し花と鳥を探勝する旅。4時過ぎに起床しラーメンの朝食後、どのパーティーより早く山にサブザックで小屋をスタート。暫らく進んだ所で笛を吹きながら小屋番が戻って来るのに会う。早朝から出ていたのは、この先の分岐から三笠新道を経て高原沼巡りコースにヒグマの出没情報があるので、新道への立ち入り禁止の看板を設置する為であった。ヒグマは通常1か月程度居座るとのこと、当分解除にはならないとのこと。この先我々も鈴を鳴らし、藤田さんから拝借した笛をピーピー吹きながら進むことに。

霧と雨に濡れながら緩い登り下りを繰り返す。時にはハイマツ、イソツツジ等のトンネルを潜り抜けチシマザサをかき分け、ウルツブソウ、キバナシオガマ、エゾオヤマノエンドウ、ハクサンチドリ等の花が咲き誇る中をひたすら進む。ハイマツの中からは鳥の鳴き声が聞こえ、時々前方で鳥が飛び立つが見分ける間もなくガスの中に消えてしまう。

所々水で覆われ、或いは深く抉れた道が続く。ただ広い平ヶ岳を過ぎ、木道を通じた所でピッチを刻む(1700m、7:50)。更に1時間弱で忠別沼を通過する。沼の中心

には対岸の雪田から離れた雪の塊が浮き、雪田に生じたガスが漂う。そこから更に1時間のかんりの登りで本日目的地・忠別岳(1962m、8:35-10:00)に到着。相変わらずガスが濃く視界は殆ど利かない。

若干の菓子類を口にして休んでいる所に、後続のツアーのパーティーが到着し一息入っていた。ガイドに引率された中高年部隊だがこの先ヒサゴ沼まで進む様子。風も吹き寒いので、記念撮影後我々も早々に引き返す事になった。引き返した直後に更に2パーティーとすれ違ったが、その後は行き交う登山者はいなかった。

帰りは砂礫帯のコマクサなどの花々をじっくり観察しながら進み、12:30に往路の休憩地に着き、パーナーを使ってスープを作り朝食を摂る(12:30-12:03)。

その後も花の写真を撮りながら進み、雨も上がりつつある中、最後の小屋への登り返しにフーフー言いながら12:50に白雲岳避難小屋に帰着した。

小屋に入ると、前日とは様変わりして混み合い、2階の我々のスペースは稍々片付けられ、2/3程度に縮小していた。その後も新たな客が入り、最終的には前日には廊下だった部分にも3名入れ込み、また、1階の階段下の狭いスペースにもシュラフが敷かれていた。

翌日の好天予報と日曜日であったことからかなり詰め掛けてきたものと思われた。また、テント場も最終的には20張り余り張られ、こちらも混み合っていた。小屋に落ち着くと流石に3万歩近くを歩いた疲労が広がる。例によってホンマキラーで一息ついた後は、レトルトカレーを温める。

7/12 (日) 晴

4時過ぎに起床すると、白雲岳などの山々にかかっていたガスが次第に切れ、朝陽がさし、久し振りに気分の好い朝を迎えた。朝食後ゆき小屋を出発、一昨日降りてきた白雲分岐に向けて登り返す。小屋の水場の傍にはリュウキンカの黄色い花が朝陽に映えている。途中数パーティーに追い越されて、620に分岐に着いた。

以前に白雲岳に登ったことのある蛭川さんに荷物の見張りを頼んで、空身の佐雑、竹中が頂上を目指す(9:38)。分岐から大きな岩屑の斜面一登りで、広い草原のような所に出て暫らく進むと、岩が積み重なり、小さな雪田を踏んで頂上に抜ける(2229m、7:00-9:56)。既に頂上には多くの先客がいたが、雪深と緑が美しい周囲の景色を堪能する。生憎くトムラウシ、美瑛岳方面は雲が湧き、頂上がその上に突き出している。

分岐に戻ってパッキングして赤岳を目指す(7:32-45)。途中の小泉岳(2158m)に向けて緩く登り、ピークは登山路から外れて緑岳へのルートを少し進んだ先にある(8:58-9:21)。再び登山路に戻り25分で赤岳(2078m、8:38-52)。ここまで来ると銀泉台から上がってくる登山者が急に増え、岩を積み上げた狭い頂上での記念撮影、北鎮岳、旭岳、白雲岳などの展望を楽しんでいた。

その後はかなり雪の多い第四、第三雪渓をグリセードの真似ことなどで下降した所で小休止(1840m、10:02-10)。その後コマクサの群落があるコマクサ平(監視小屋が設けられている)を登って来るツアー客の間を縫って下り、目的地の銀泉台の車が見える展望地で、朝に準備したすしの素を混ぜたアルファ米を海苔で巻いて昼食(1740m、10:35-11:06)。その後は一部急な雪深のトラバースなどもあったが、ウラジロナナカマド等の群落帯を経てひたすら下り、11:55に藤田さんの待つ銀泉台に到着。

藤田さんから紀巳子さんの下山後の様子を確認するなどして、藤田車に乗車。

層雲峡に下る車中で、藤田さんが我々を待つ間に層雲峡ロープウェイ駅近くでシナノキ自然樹を何本か見付けたとの話があり、案内してもらった。それは駅上の小学校の近くにあ

り、接近して葉の様子、樹肌などを確認して勉強した。我々がシナノキを意識したのは、3年前のニペソツ山遠征の際に糠平温泉に泊まった時に、昔は周辺シナノキが非常に多かったこと(ニペソツはアイヌ語で「シナノキが群生するところ」の意味)、樹皮繊維の活用、花の蜂蜜などについて宿の人から聞いてからである。佐雑さんはそれ以来シナノキの実物を探し求めていた。そのことを知って藤田さんは札幌市内に街路樹として植樹されたシナノキで予め勉強しておいてくれた上で、層雲峡近辺で実物探しをしてくれた。

研究を終えて、旭川の駅前の「ホテルメイツ」にチェックイン。夕食は日曜日で営業している店も少なかったが、藤田さんの情報に従って、お座敷居酒屋「大舟」に上がって北海道の山海の味を楽しみ、併せて藤田さんへの感謝の集いとした。

北海道紀行

シマフクロウと釧路湿原ガイド・ツアー

蛭川 隆夫（昭39年卒）

風雨にたたられた大雪連峰の前半戦を終え、湿りきった荷物を乾かすいとまもなく後半戦に移行。シマフクロウとの出会いを求めたの旅だ。それに釧路湿原自然観察ツアーと道東の山登りを加えた。シマフクロウは、天然記念物であり、また絶滅危惧種。アイヌ語でコタンコルカムイ（村を守る神）とよばれる。この言葉が示すように、アイヌ民族の居住場所とシマフクロウの生息場所とは重なり合っていたらしい。サケなどの川魚を捕るのに好都合な、川岸の平坦な台地に広がるミズナラの林にとともに住んでいたのだ。

7月13日（月） 雨

前半戦でお世話になった藤田さんの見送りを受けて、佐藤恭（S31）、蛭川隆夫（S39）、竹中彰（S39）は、レンタカーで旭川を後にした。今日の目的地は、シマフクロウの宿で

ある養老牛温泉。

途中の美幌市内で、旅のお友として「北の勝」一升瓶を購入。小野さん（S40）ご愛飲の根室の地酒で、蔵元は百年の歴史を誇るらしい。

またもや雨模様。計画していた藻琴山（1000m）はとりやめ、弟子屈経由で養老牛温泉に直行することにした。濃霧の美幌峠を越えるときは、大きな雨粒が強くボディを叩いた。

明日泊まる西別小屋へのアブローチを下見してから、予約した「湯宿だいいち」にチェックイン。佐藤さんの話では、シマフクロウ目当ての「日本野鳥の会」会員に人気の宿だ。フクロウ大好き人間の私には、シマフクロウは長年にわたり憧れの的だ。いよいよ今晚、ご対面かと期待に胸をふくらませつつ宿帳に記帳した。

ロビーでウエルカム・ドリンクを飲みながら仲居さんと話していたら、6月23日の集中豪雨で川岸の生け簀（餌場）が土砂に埋まつてしまい、それ以来、憧れのお方はほとんど姿を見せないという。佐藤、竹中両名は冷静な顔をしていたが、私は思わず「えっ!!」と大声をあげてしまった。そうしたら、「キャンセル料はゼロで結構ですから、近くの『旅館藤や』にかかりますか」と言ってくれた。よ

ほど私が落胆した表情を見せたからだろうか。ここまで来たからには料金アップを厭わず宿替えしようと衆議一決。

「旅館藤や」は、川面よりも高い裏庭に生け簀があり、それで豪雨の被害を免れたらしい。そもそも、7年前に泊まり客が親子で遊ぶようにと池を作り、そこに魚を放したものだという。ところが、池はシマフクロウの餌場と化した。それを聞きつけた環境省スタッフがすぐに駆けつけてきて、シマフクロウの足にカラー・リングを付け、そして「動物園化させないよう」と指導した。それで、宿としては餌の養殖ヤマメ（本州のヤマメ）の投入は一回に50匹に抑え、それがなくなるまで補充しないなど注意しているとのことだ（1週間から10日で食べ尽くされ、5〜6万円/月の出費らしい）。

生け簀を真ん前に見る1階の部屋で、夕食まで佐藤さんから野鳥に関する講義を聞いた。日本には11種（最近の学説では12種）のフクロウがいること、そのうち純白のシロフクロウは北極圏から渡ってくるが日本では繁殖していないこと、シマフクロウは日本最大のフクロウであること、フクロウ類は頸を270度回転させられることなどなど（帰宅して『シマフクロウ』という観察記録集を読んだら、さらに頭部を150度回転させられ



7月9日、黒岳山頂。左から佐藤、蛭川夫人、蛭川、藤田。

る、しかし眼球は動かせないと記されていた。そのうち旅館の主人が庭に出てきて、生け簀のネットを外し、丁寧にたたんだ。

夕食時、旅館の横の電柱に留まっていると仲居さんが教えてくれたので、食事を中断して外に出た。見上げると、つがいと1羽の幼鳥。このようにまずは電柱にしばらく留まり、次に屋根に移ってそこでもしばしば滞在して、それからやっと生け簀に飛び移るのだそうだ。捕食動物（キツネなど）を警戒しての習

性だろつという。佐藤さんによると、アメリカではこういうときバード・ウオッチャーは「三匹」と言うそうだ。「生涯を通じて初めて見た鳥」という意味らしい。シマフクロウは、佐藤さんにとって日本の野鳥で253番目のライファーとなった。

夕食後、部屋に戻り、講義の続きを伺いながら、じっと生け簀の方をうかがった。午後8時頃、庭園灯が一つだけ点された薄暗い中、窓ガラスを左斜め上から右下にかけて横切る一つの影。生け簀の囲いに、こちらを向いて（あるいは頸を回転させて？）留まったのは、まさしくシマフクロウ！ 図鑑では灰褐色とあるが、全体に白っぽい感じだ。例によってしばしあたりを警戒してから生け簀に入り、あきらかに魚を捕まえた。このときちょうど双眼鏡を構えていた竹中さんの観察では、「ついでむというより、丸呑みする感じだった」そうだ。間近に憧れのお方を拝むことができた安心感からか、急激に眠気が襲い、不覚にも一時眠り込んでしまった。結局この夜は、生け簀にやってきたのはこの1羽だけだったそうだ。あとの2羽は、どこで魚を捕まえたのだろうか。近くの川の天然ヤマベが豊漁のときは生け簀飛来回数が減るとも女将が言っていたので、あるいはこの夜は川で漁をしたのかもしれない。

「藤や」は、『釣りバカ日誌』第22作のロケ地。この人気のシリーズは、川釣りをテーマにした同作をもって完結となる。

7月14日（火）曇りときどき晴れ、のち雨。チエックアウト時に、旅館の主人とシマフクロウ談義。「最近、近くにエゾライチョウがよく出てくる」との話もあった。シマフクロウのグッズと絵はがきを記念に買って、標津岳（1061m）に向けて車を出した。

「藤や」の裏手にあたる林道を走っていると、1羽の茶色っぽい鳥が飛び立って、ほんの一瞬で樹林の中に消えた。ブレーキを踏んで行方を目で追ったが、佐藤さんは双眼鏡を構える余裕がなかった。後刻、佐藤さんは、尾の形からしてエゾライチョウの可能性が高い」と言った。そうであれば、宿の主人の証言もあることだし、ライファーとしてカウントしてもよさそうだが、きちんと確認できなかったのでもうはしないのだと言う。ゴルフと同じで良心に従って申告するのだそうだ。もともと「棺桶に入るときは、やはりあれはエゾライチョウでしたと神様に認めてもらう」との発言もあった。ちなみに本州のライチョウと違い、冬になっても白くならないそうだ。

林道を6kmほど走ると、立派なトイレのあ

る登山口（駐車場）に着いた。身ごしらえして9時30分に登り始めた。各合目に標識が付されている。それをそれぞれ15〜20分で通過して、5合目で小休止（10:55〜11:03）。さすがは北海道の山で、1000メートルに満たない8合目あたりからハイマツが現れた。そのトンネルを漕いで、224に頂上に到着。阿寒岳、知床連峰、斜里岳、根釧原野の眺望を期待していたが、あいにくのガス。それに風があつて寒いので、早々に下山とした（12:52）。8合目で昼食（13:23〜14:10）。この頃からガスが切れ始めた。ジグザグの下り斜面にダケカンバの見事な純林が続く。林床のチシマザサ（ネマガリダケ）とダケカンバの樹肌とに、曇り空を通して柔らかな午後の日差しが当たり、それは美しかった。

長い下りにうんざりした頃、登山口に帰着（16:00）。昨夕下見しておいた西別小屋に入った。太い丸太を使ったログハウスの2階建て。大きな薪ストーブが中央に据えられていて、薪も豊富に用意されている。寝具や炊事用具もかなり備え付けられている。水は持ち込まなければならぬ。相客はおらず、広い室内を占領して「北の勝」を飲み、夕食を取った。本州にもこのような無料小屋があつたらいいなと思った。

7月15日（水） 雨

起きると、しつかりと雨が降っている。西別岳（800m）から摩周岳（857m）を往復する計画だったが断念し、標津町の「標津サーモン科学館」に転じた。知らなかつたが、サケ科、サケ亜科、イワナ属という系統で、イワナ（Salmo）もサケの仲間だと展示されていた。その一つ、ホッキョクイワナ（Arctic Grayling）はとても美味らしい（アラスカで賞味したことのある佐藤さんの言葉）。佐藤博物学者は、鳥、花、木に加えて魚も勉強中らしい。

この日の宿は、標茶町の民宿「木理」。隣のコンビニで「北の勝」を補充。佐藤さんが道々観察した白い花の木の名前を知りたがつていたが、同宿の林業関係の若者一行がハシドイ（ライラックの仲間）だと教えてくれた。

7月16日（木） 曇りときどき晴れ

釧路湿原のプライベート・ツアー。探鳥を主眼としたので、朝早く5時に「塘路ネイチャーセンター」に乗りつけた。出発前の打ち合わせで、佐藤さんが要望を出した。「無理を承知でお願いするが、エゾフクロウ、エゾライチョウ、オジロワシ、クマガイ、タンチョウ、それに魚のイトウを見たい」。若い男性ガイドは、「このお客さんは、ただ散歩するだけの観光客とは違つな」と見たのか、やや緊張

した表情を浮かべた。このガイド、野鳥だけでなく、草花、樹木、アイヌ語、考古学など何でも答えてくれた。

まず向かったのは、湿原東側のシラルト口木道。駐車場から、「蝶の森」を経て終点まで約30分のウォークである。途中で、湿原特有の景観である谷地坊主や谷地眼が見られた。終点には、展望台や野鳥観察台。眼前に湿原が広がり、そこを飛び回るノゴマを観察した。興ざめは、湿原を切り裂くJR釧網本線の線路。昭和の初めに他所から土を運んで土盛りしたらしい。今ならとてもそんな「自然破壊」は許されないだろうと思った。

後半は、これまた土盛りの横断道路を西に走り、さらに南下して、温根内に向かった（その途中で塘路湖沿いに林道を分け入り、湖岸の樹枝に留まり魚を狙っているオジロワシを遠望した）。そのドライブに小1時間かかった。「釧路湿原は開発で面積が昔の60%になった。それでも、縮小後の面積が日本全体の湿原の60%を占める」とのガイドの説明があつたが、尾瀬がとも及ばない釧路湿原の広さを車に揺られながら実感した。温根内の湿原には、環境省が巨費を投じた、長い木道が整備されている。木道敷設のこれまでのノウハウや経験をすべて盛り込んだ、最高品質の木道だとガイドが説明した。

最初は、低層湿原を歩いてゼンソウやヒメカイユの花を観察した。鳥では、ベニマシコ。佐藤さんには、254のライファー。日本の野鳥は約540種なので、佐藤さんはその半分近くを見たことになる。佐藤さんがバードウォッチングを始めたのはアメリカ駐在時代とのこと。アメリカでの体験などをH U A C に投稿頂きたいものだ。高層湿原でツルコケモモ、ガンコウラン、ハスカップ、トキソウなどを観察して、6時間のツアーも終わりに近づいた頃だ。我々を祝福するかのようについにタンチョウのお出まし！アシヤスゲに下半身を隠し、こちらを警戒しながら少しづつ離れていった。

午後、釧路市内に移動し、民宿「木理」の主人お勧めの「ふくろう倶楽部/喫茶ローゼ」を訪ねて昼食。店内には、フクロウのグッズや図書があふれている。経営者の渡邊松子さんは、エゾフクロウを撮り続けているアマチュア・カメラマン。佐藤さんを日本野鳥の会会員だと紹介すると、「自分はフクロウには過度に接近せず、驚かせないように注意して撮影している」としきりに言い訳する一幕もあった。

夜は、ガイドご推薦のお店「炉ばた」で山海の珍味を肴にして今回の北海道紀行を振り返る予定だったが、暖簾をくぐったのが5時

ちよつと過ぎなのに、すでに満員。炉端焼きなるものの発祥の店だけに、観光客が押ししかけるのかもしれない。

7月17日(金) 曇りときどき晴れ

T Vも新聞もトムラウシでの大量遭難で持ちきりだった。釧路空港に向かいながら、自分ももしかしたら危なかつたかと、今回の装備不良をあらためて反省した。

機内に持ち込んだ「サッポロクラシック」350ml 1缶では足りず、羽田空港で蕎麦をつまみに反省会をして今夏の北海道の旅を終えた。

新人歓迎山行

(山田秀明記)

6月20日(土)に行われた三ツ峠での新歓山行は、天気にも恵まれ、意外にも充実したハイキング(?)になってしまいました。

最終的な参加者は学生4名(糟谷、伊藤、米田、望月)、OB7名(竹中、蛭川、小島、佐藤力、中村雅、本間、山田)の総勢11名。OBは駅からの標高差1200mにめげないツワモノばかりです。

途中「あれっ、また休憩するの?」と思

たくもなるほどの頻繁な休憩の数(失礼!)を挟みながらも予定通り駅から4時間、ちよつとお昼に三ツ峠の肩にある小屋へ到着するのはお見事。学生はこゝまでは余裕の態。しかし、頂上直下にある岩場で行われているクライミングの姿に少し驚いていたようでした。こんなのをやってみたくないと志すモノが一人くらいいるかと思ひ、三ツ峠を新歓山行の場に残ったのですが、誰もいませんでした。残念。

さて、小屋のテーブルは一人100円の使用料の張り紙。そのお陰で、我々だけで立派なテーブルを占拠。本間さんが準備された味噌汁やコーヒーをいただきました。某お二人方以外は、チョンボせずしっかり山頂に登り、記念撮影。でも残念ながら、富士山は見えません。

下山は、同じルートを下るのはつまらないだろうと、御巢鷹山方面へ少し行ったところにある北口登山道から宝鉢山へ。宝鉢山のパスは一本しかないため、ちよつとドキドキです。しかし、この道がなんともいえない悪い道なのです。途中で道がわからなくなったりもしますし、沢沿いで滝を巻き下ったりしたりするとこゝろもあります。ここではOBが目躍如。一方の学生は、まったくなれていないのか苦労しています。しまいには足があか



6月20日、三ツ峠の岩場前で。(中央岩場)山田、左から佐藤(力)、伊藤(社2)、米田(法2)、望月(商2)、糟谷(経2)

らさまにガクガクしている始末。結果、コースタイムよりもちよつと時間がかかり、バスの時間が迫ってきます。最後は、林道を走るように下り、バスの5分前でセーフ！ っと思つたら、バスの時間が20分いつの間にか遅くなっていたというオチも。

バス、富士急行を経由して大月「かあちゃん」で盛大に打ち上げをして、帰途につきました。

それにしても、ハイキングとはいえないハードな登山でした。お付き合いくださったOBの皆様、どうもお疲れ様でした。

懇親山行 浅草岳・守門岳

7月31～8月2日

参加：佐藤、上原、三井、竹中、蛭川、佐藤(力)(浅草岳のみ)、本間、三森(守門岳のみ)、中村(雅)、齋藤(正)

リーダー&コーディネーターの三井さんの呼びかけと努力で、最終的に10名が参加し、越後の名峰で日本二百名山の一つである守門岳、三百名山の一つ浅草岳の2峰を2日連ちやんで登るといふ企画が実現、首尾よく登頂を終えた。 齋藤記

7月31日

東京駅集合、上越新幹線で、浦佐へ。更に上越線、只見線と乗り継いで、大白川駅に着。迎いのマイクロボスで、国民宿舎浅草山荘へ夕方5時ごろ到着。この日は夕食頃より雷雨となり、やつと22時頃止む。夜には地震というおまけもついた。ここから15キロ程西の新発田へ小出断層といえは有名な活断層だということ思い出した。夕食に先立ち、つい先ごろ亡くなられた山崎氏に佐藤さんの音

頭で献酒し、ご冥福をお祈りした。夕食後いつも通り佐藤氏持参の名酒と肴で、検討会。山荘は立派過ぎるほどの建物で、部屋も湯もよく、食事もなかなか良かった。しかし我々のほかには一組だけで、盛夏の山荘としては寂しい限り。結構暑い。就寝21時。

8月1日

7時半朝食、8時出発という登山にあるまじきことになったのは、ひとえに山荘の「親方日の丸」のせいだ、どうにも朝食を早める事が出来なかつたためである。マイクロボスで8時20分にネズモチ平駐車場。既に数台の車あり。朝方見えていた青空も、この頃には既に湿気一杯のガスで閉ざされ、谷を隔てて見えるはずの守門岳方面も全く見えない。8時半出発。軽舗装の林道を10分ほど歩き、桜ソネ登山口からの巻き道の合流点から登山開始。すぐに、ぐちよぐちよの道を木の根に滑りながら登る。ぶなの巨木は見事で、秋ならさぞ雰囲気も良からうと思う。佐藤氏の木々草木の解説に一同感服。

浅草岳は水が豊富な山で、ずっと沢の水音を聞きながら登り、標高900メートルくらいでそれが切れると少し急になる。気温は20度。とにかく蒸し暑い。風なし。途中雨がぼつぼつしたがすぐ止む。尾根はそぎ落ちたよ

うなところも無く安全だ。迷うところも全く無い。

木が少しづつ減り急なぼりにひとときわ汗をかくと前岳の分岐に出る。この頃は短時間ながら視界が広がり浅草岳や周囲の山々が見えた。分岐から15分、庭園のような草原の木道を行くと浅草岳だ。時期が時期なら、このあたりヒメサユリが裾をなせでるはずだが、時遅し。到着11時45分。田子倉湖や鬼ヶ面岳もしばらくは見えていたが食事している間に視界は失せた。我々のほかに数人。静かなのがいい。

蛭川、佐藤氏は今日中に帰宅なので、早々に下山開始。12時半。下山路は前岳分岐で、鬼ヶ面へ道を分けてから木道を行き、やがて尾根筋となる。カヘヨの何とか言う小ピークをあとと言う間に過ぎ尾根を下る。ところどころ尾根は痩せているところもあるが総じて安全。いやなのは道が雨で揺れていて歩きづらい事くらい。200mほど下って木々が増えてきたところで遂に雨具の世話になった。ひたすら暑さに耐え、2時30分、皇太子殿下成婚記念の鐘がある、桜ゾネ登山口……ネズモチ平への巻き道舗装道路にでる。途中数年前の雪崩による救援隊の遭難碑に合掌。更に30分歩いて登山口に戻り、出迎えたマイクロバスで山荘に。



8月1日、浅草岳山頂。

雨はその後も止まず。風呂に入り、早速部屋で、反省会。する事30分。蛭川、佐藤氏は帰ったが、この時には三森氏も合流し賑やかになった。夕食時後ろの席で食事をしていたご婦人方がはからずも佐藤氏の高校の後輩とわかる一幕があった。彼女らは明日の長岡花火大会に行くという。夜再び、反省会。就寝21時。

8月2日

出発8時5分。マイクロバスで、入広瀬大原スキー場まで行き、そこから登山開始。8時30分。意外にも雨が降らない。牧場跡を横切るといきなり急登となる。しかし道は浅草岳より木の根が蔓延^{はびこ}っていない分登りやすい。40分で、尾根に出る。ところどころ尾根はそぎ落ち、石のような粘土のような滑り安い路面が急傾斜で続き、数カ所ロープの張られたところもある。不注意は禁物だ。出発後1時間、上原氏の脚の調子悪く、一人で下山する。危険な尾根筋を1時間ほど急登すると水場。更に急登30分で、緩やかな草付き道となる。キスゲの花盛りが出迎えてくれ心むむ。

最後の急登10分で守門岳頂上着。11時59分。結構視界も良く、浅草岳は勿論、西に黒姫、南に越後山脈や三国山脈の山々、東に遠く会津の山々が望め、食事しながら360度の眺望を堪能した。佐渡や能登方面が見えなかったことをばやくのはは驚沢というべきか。気温はやはり20度前後で蒸し暑い。

花で有名な守門岳だが、シラネアオイ、ヒメサユリ、ゴゼンタチバナなどはみな終わって少し寂しい感じであったが、ノリウツギ・クガイソウ・キンコウカ・イワシヨウブ……ケイランなどが盛り。イワカガミなどはこれからのようだ。佐藤氏の該博な知識には恐れ

入るばかりだ。アカモモの実を食べてみたが結構いけることが判った。

下りも同じルートを取る。登り同様滑りやすい土に少し緊張したが、予定通り15時に登山口に戻り、待っていた上原氏と合流。山荘手配の車で入広瀬駅前の壽和温泉に。入浴後例により「反省会」をし、帰宅の途に。小出駅では待ち時間に駅前の蕎麦屋で、皆で上等の蕎麦を戴いた。なにより事故の無い事、雨の降らない事が良かった。

標高差1000m余を2日連続で登るのは、率直に言ってそんなに楽なものではなからうが、私よりいくつも年上の先輩諸氏の夕フさにはただただ感服するばかり。齋藤は帰宅時間が夜中になる関係で、小出駅前旅館に投宿。この晩また雨となったが花火大会はあったようだ。3日湯沢の町湯につかって帰宅。針葉樹会の方々の山行には長いプランクがあったが、心配掛けないように精進しようと思う。

山崎拡氏の遭難報告

針葉樹会会長 竹中 彰

津久井警察署生活安全課近藤課長より「7月23日、午前7時頃相模川と道志川の合流地点で釣人により発見された水死体はご家族によつて、山崎さんであることが確認されました」旨の連絡を受けました。山崎さんは相模川を河口から上流忍野八海まで歩いてみよう」と計画され、これまで数回ウオークを実施され、津久井湖近くまで到達された様です。

7月20日(月・祝日)は朝6時半頃平塚の自宅をスタート、8時過ぎに橋本駅着、バスで津久井湖方面に向われ、津久井湖周辺から相模川沿いに歩かれて、事故に遭われたものと思えます。

山行現役最長老の山崎さんをこのような形で失うことは誠に残念で、今年3月の懇親山行(丹沢・三の塔)での元気なお姿を思い浮かべると、まだ現実のことは思えませんが、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

7/21(火)の三月会(山崎さんも出席を予定していた様子)の場にご家族から本間さん宛に「昨日(7/20)から相模川のウオー

クに出かけ、未だ連絡が取れない。先ほど警察にも捜索要請を行った」との電話が入った。その後7月22日には警察が津久井湖一帯を水上、陸上から捜索を行ったものの、捗々しい結果は得られなかった。

7/23(木)の三月会の場にいたメンバー(佐藤、中川、三井、高橋、蛭川、竹中、本間、三森、高崎、岡田)のうち、佐藤、蛭川、竹中、本間、高崎の5名が午前9時に橋本駅に集合し(ご家族からの連絡によれば、7/21午前8時過ぎの駅の改札通過が防犯カメラに撮影されていた由)、津久井警察署に向向き、情報を確認し、今後の針葉樹会としての対応を検討することとした。一応現場とみられる津久井湖周辺の一次捜索が可能な準備をして集まった。

しかし、警察で生活安全課の近藤課長と面談した際に、先方から「今朝7時頃津久井湖の道志川寄りの水面に浮上した男性を収容し、平塚の山崎さんのご家族に連絡をとったところ」との説明を受けた。夕方にかけて家族の到着を待つて警察として色々対応することなどで、第三者である我々の出番は無くなくなり、連絡窓口としての本間さん(ご家族との連絡窓口でもある)の連絡先を伝えて警察を辞去した。

三月会通信

6月15日

その後本間さん宛に近藤課長から家族も本人を確認した旨の連絡があり、それを踏まえてH U H A Cでご連絡した次第です。山崎さんの思わぬ遭難事故に対し改めてご冥福をお祈り申し上げます。

7 / 24 (金) ご遺体を茶毘に付された。

7 / 25 (土) 奥様のキリスト教会で葬儀

を実施。

平成21年9月12日(土)、横浜緑園キリスト教会(日本福音キリスト教会連合、プロテスタント)にて納骨式が行われました。

【出席者】 山崎 佐藤 三井 遠藤 高橋
蛭川 竹中 三森 高崎(俊) 本間記

山崎さんが、昔の学生時代の写真をお持ちになりました。石井さんがよくおっしゃる「サングラス」とはこの方が、と。着衣は我々の頃と変わらず意外でした(明治大正の頃の登山姿が頭にあつたものだから)。そういえば、最近石井さんが会にお見えになりませんが、お身体の具合が良くないのでしょうか。気になります。

蛭川さんから、去年奥多摩でやったような(山は各自体力に応じて登る)温泉主体の山行を計画したらとの提案がありました。良案。参加希望。

遠藤さん高橋さんと揃えば話題は「神社」、これに最近業界デビューの佐藤さんが加わり一段と面白くなりました。「山神社」「事任八幡宮(遠江)」、レベルが高くてコメントできません。ヨセミテの話からアメリカの分水嶺と河川の位置関係? 五大湖の水はどこに流れていくのか? と、アメリカ地理の話に広

がりました。山に限らずどんな話題にも応酬がある、知力に乾杯ですか。

山行記録

山崎 6 / 2 「相模川を遡る」第2回 本

厚木〜八管山。今年の年間計画は河口から

忍野八海まで。

佐藤 5 / 17〜19 釜トン先で崩壊、霞沢

岳を断念、八方へ。超強風のため

竹中 出発が遅れ丸山ケルンで引き返す。

(佐藤)

懇親山行・文庫披露後、八方尾根から唐松

岳を目指す。帰路大町の山岳博物館へ。強

風で100m進んだところで小屋に引き返

す。帰路、大町で小谷部先輩の山日記、加

賀正太郎・中村清太郎ほかの業績・サイン

等を実見する。(竹中)

三井 6 / 12 日光白根山。往復5時間(丸

沼ロープウェイ利用)。13日、男体山往復

7時間半(中禅寺湖畔より)

遠藤 6 / 10 高麗峠〜天覧山。同期ハイキ

ング会の幹事として下見。

高橋 5 / 22 天覧山〜大高山。クラスメー

トと4人で

蛭川 昼から会5人で(蛭川・小野・三森・

他2)

三森 5 / 20 鳴虫山。21日、太郎山。

竹中 6/11、12 6/12 鳴虫山(11

03m)メトロ口会世話人懇親会で日光の光

徳小屋(学習院)へ。翌日、日光駅前の鳴

虫山へ。

三森 6/4 石裂山^{おさく} 倉知さんと二人で。

高崎 6/11、12 徳澤園、中畠新道入

口。平川の追悼。今回は生残りの同期4人

に加え、石田夫人、中村(雅)さんが参加。

快晴の下、山讃賦を歌って追悼。残雪多く、

レリーフはシュルンドの中に確認するの

み。

山行計画

佐藤・蛭川・竹中 7/9、大雪山の花畑

めぐり、後半は道東の山をめぐり釧路湿原

を散策して帰京。大雪は小野さんの友人の

藤田さんの案内で。

三井 7月 富士山(剣が峰・未登)。

高橋 6/18 本仁田山(瘤高山經由で、鳩

ノ巣駅から奥多摩駅に下る)。

蛭川・三森 6/17 高水三山。長沢さんを

誘って。その後中村(雅)さんの息子さん

のやつている飲み屋(西荻窪)へ。有賀さ

んも見える予定。

三森 7/2、北海道日高。倉知さんと二

人で。私は釣りをする。10、11月 エベ

レスト街道トレッキング

7月21日

【出席者】 佐藤 中川 三井 高橋 蛭川

竹中 三森 高崎(俊) 岡田 本間記

北海道大雪山の遭難が話題に。同じ頃に行

っていた佐藤さん・蛭川さん・竹中さんの

話、毎日新聞ツアーによく参加している三井

さんの話を聞くと、時間的制約があり、とに

かく前に進まなければならぬツアー登山の

欠点がモロにでた結果か、と感じました。私

も丹沢で、ツアーの場合は気象条件とメン

バーの体調を最高点に置いて計画を立ててい

るのではと危惧したことがあります。案の

定そのグループは途中中山小屋で一泊したよう

でした。

高橋さんの「三つ池」、三森さんの「ヒマラ

ヤ・トレッキング」などを話題にしていた処

に、山崎さんのご家族から「父が前日、20日

朝に相模川方面に出かけ未だ戻ってない。な

にか心当たりはないでしょうか」との電話が

ありました。前月の三月会記録(本厚木・八

菅山)以外に情報もなく、警察にはすでに届

けているとのことであり、我々も動きようが

なく、警察からの情報連絡待ちとしました。

慎重な山崎さんが事故には考えられず、と

にかく元気でいて欲しいという気持ちでし

た。

山行記録

佐藤・蛭川・竹中 7/9、17 北海道(大

雪の黒岳、北思別岳、小身岳、赤岳)。蛭川

夫人、現地で藤田さん(小野さんと北電同

期)も参加。標津岳、釧路湿原。花と野鳥

観察。シマフクロウ、丹頂鶴、キバナシヤ

クナゲ、ウルツブソウ、イソツツジ、エゾ

コサクラ等を観察。

中川 7/20 奥多摩・高水三山(軍畑)三

山(御岳)。シニア向け・日帰り山行。御嶽

駅付近の玉川屋(そば屋)は満杯で入れず。

高橋 6/18 本仁田山(鳩ノ巣)本仁田山

(奥多摩)。クラスメイトと三人

竹中・蛭川・本間 6/20 三つ峠山(新入

部員歓迎山行)。糟谷部長他3名の新人とO

B7人。下山後大月で反省会。宝鑑山への

下山路はナカナカ厳しい下りでした。

三森・蛭川・長沢 6/17 高水三山。ひさ

びさに長沢さんと会い、小雨と霧のなか高

水に登る。帰りは日帰り温泉に入り、その

後西荻のダイニング さんちん(中村雅

さんの息子さんの店)に寄る。これには有

賀さんも参加。山もお酒も両方、非常に楽

しかった(三森)。呼びかけ人の三森さんに、

なんとコースは蛭川が決めると言われ、高

水三山とした(蛭川)。なお長沢さんとは蛭川さんと同期のあの「長沢」です。

三森 7/3〜9 十勝幌尻岳、芦別岳、倉知さんと。山は、とても長い山でした。釣は念願のヤマメ(小)も釣れて満足。帰路私は小野さんと昼飯を。

高崎(俊) 6/28 唐沢鉱泉、西天狗、東天狗、黒百合平、唐沢鉱泉。念願の西天狗岳に登れた。次は冬に。

山行計画

浅草岳・守門岳(針葉樹会懇親山行) 7/31
8/2 佐藤、三井(リーダー)、竹中、岡田、本間、蛭川(浅草岳)、三森(守門岳) 三井 7/24〜25 富士山(八合目泊まり) 毎日新聞旅行。

高橋 7/28 大仁田山(飯能)。クラスメイトと。

8月17日

【出席者】 佐藤 三井 高橋 蛭川 竹中 小島 高崎(俊) 中村(雅) 本間記

山崎さんのその後は竹中会長からメールでお知らせしたように残念な結果となりました

た。先日、ご遺族の方から、針葉樹会員あてに納骨式(9月12日、横浜緑園キリスト協会)にご参列いただき、そのあと故人の山の話し等をお伺いしたいものです、との連絡を受けましたので、メールで会員の皆さまに伝えることといたしました。

会報幹事の小島さんから追悼文を会報に、山行幹事の佐藤さんから秋の懇親山行は山崎さんの追悼山行とし、湘南の「高麗山」ではとの話があり、いずれも皆さんの賛同を得、追悼山行は11月11日(土)と決まりました。

詳細は追って連絡いたしますが、その際は是非ご参加ください。なお佐藤さんは山崎さんと行かれる予定だった白馬・風吹大池に近々登り、追悼第一号山行とされるようです。

山行記録

浅草岳・守門岳(針葉樹会懇親山行) 越後シリーズ第4弾。8/1 浅草岳 三井(リーダー) 佐藤 上原 蛭川 竹中 佐藤(力) 斉藤 中村(雅) 本間。山頂

は東北の山風で、急に展望が開けて眺めも良く、意外に登山者も多かった。下りは雨か止むかで最後に土砂降り、ヤマを満喫しました。

8/2 守門岳 三井 佐藤 上原 竹中 三森 斉藤 中村 本間。昨日とはちがい

天気は持ちそうので右に滝を見ながら尾根筋に登る。もつとも何か所かロープも付いていて浅草岳よりもきついのは。山頂手前のキスゲは見ものでした。まずまずの天気で楽しかった(竹中)。初日浅草岳で少し降られた程度で良い山行でした(中村)。

三井 7/24〜25 富士山(毎日新聞旅行) 八合目白雲山荘に泊まり、久須志岳登頂。強風で剣ヶ峰は行けず。

高橋 7/22 大仁田山。飯能からバスで、クラスメイト3人と。

竹中 7/13 日向薬師、見晴台、大山下社。如水会町田支部平日ウォークに参加。小島 7/14 蓼科山。快晴、360度のパノラマ。小島・中村(雅) 7/18〜20 朝日連峰(大鳥小屋、伊東岳、狐穴小屋、寒江山、竜門小屋、日暮沢)。18・19は悪天、特に19日は風雨強く、吹き飛ばれそうになった。大朝日岳は登れず、エスケープルートで下山(中村)。

山行計画

佐藤 来週、山崎さんの追悼山行。2泊3日で風吹大池に。

高橋 8/24 陣馬山、相模湖駅。クラスメイトと。

平成21年度会費納入のお願い

平成21年度の会費納入をお願い致します。納入状況等に関するお問合せがありましたら、会計幹事までEメール/電話にてお問合せ下さい。

会費納入先銀行口座

- (1) 銀行名 三菱東京UFJ銀行 赤坂支店
- (2) 口座名 針葉樹会
- (3) 口座番号 普通口座 4825647
- (4) 振込時「摘要欄」にお名前(卒年次)を「ミヤシタ(S57)」等記入下さい。

会費額 卒業年次によって左記のようになって
います。

昭29年以前の卒業(昭29を含む)	免除
昭30～42年の卒業	4000円
昭43～62年の卒業	6000円
昭63年以降の卒業	5000円

幹事連絡先

宮下 克彦(昭57卒)
E-Mail Kat.Miyashita@nitsui-steel.com
電話(会社) 03 55444 6925
Fax(会社) 03 55444 6483
(三井物産スチール・第二部門造船鋼材部)

編集後記

今回の会報は近藤さんの追悼特集となりました。倉知さんはじめ、近藤さんと山行きを共にされた多くの会友が寄稿してくれました。近藤さんについては、皆さん共通して話されているのは、近藤さんの常に新しい目標を定める、それに向かって最大限の努力をする意思の強さです。皆さんの原稿を読ませて頂いて、近藤さんの人柄が浮かび上がり本当に惜しい人を亡くしたと思いました。

さらに山崎協会員の訃報を今回報告する事となりました。山崎さんも、つい先日まで懇親山行にもお元気に参加されていましたので信じられない悲しい知らせでした。お二人のご冥福を心からお祈りいたします。(小島)

会員の訃報を聞くのは寂しいです。近藤君のように元気で山に登っていた「若手」がいなくなってしまうと、なおさらです。つい先日には高橋史郎君の訃報も飛び込んできました。私がリーダーのときに一年生で入ってきたのでよく憶えていますし、春の鳳凰三山に歓迎山行したときの様子が今でも目に浮かびます。登山はほとんど無沙汰していますが、奥多摩の山へは毎月、一、二回通って、木を切ったりワサビ田の手入れをしたりしています。鳩ノ巣に「サティアン」と称する一軒家を仲間と借りてベースにしており、川苔山へのコースもすぐ近くなので、ほとんどいつか登ってやるうかと徐々に「登

高欲」が萌してきました。(井草)

今夏の山行で見聞、体験したことです。今年初といえば、女性登山者のスカート姿。朝日連峰の以東小屋で50代とおぼしき方が生足を出してミニスカートをはき、濡れた衣類を干していた。北海道では若い女性がスパッツ(タイツ)の上ミニスカートをはき、連れの男性のあとを少々うつむき加減に歩いていた。どちらもギョツとしたけど、好き好きの問題かな。女性も男性も例年より若い人が多いと感じた。白馬西麓の蓮華温泉では、梅池からピークを踏まずに池をめぐって蓮華温泉を往復するという渋いコース選択の女性二人連れと会う。以東小屋では軽量化にとことんこだわり、写真を撮ることを最優先させるといふ単独の男性と、ミニフライパンが山道具の必須アイテムという、食事重視型の単独の男性と隣り合わせになる。それぞれ30前後の若い人だが、スタイルを感じた。「フライントラック」という下着を新調した。以東小屋に居合わせた登山用品店勤務の人が「濡れる感じがしない」と良さを強調しており、着干しを余儀なくされた身にはとても魅力的に思えた。かさばらず、重量もないから荷物に加えて負担にならないし、たしかにあたたかい。とくに汗で体が冷えてしまう人におすすです。(川名)